

留数理論と超函数

— Local cohomology 理論よりみた

留数理論 —

名大 理 浪川 幸彦

留数は一変数解析函数論で良く使われますが、この多変数への拡張は Poincaré, Picard, Leray, Norguet によってなされた。(15)の文献参照) 特に Leray の仕事([3]) は決定的である。こゝでは、この理論を category of "holomorphy" において、local cohomology を用いてみることを目標とした。ただし初等的知識を前提とする。

§ 0. 記号

次の記号遣は、最後まで 断りなしに用いた。

X : (複素) n -次元 複素解析多様体。

Ω_X : X 上の正則函数の芽の層。

注) 他に、例えば Cauchy - Fantapie の公式なども、書き直すことができる。

Ω_X^p : X 上の正則 p -形式の層。

→ →

Y : X の余次元 d , 次元 m の角部分 (解説) 多様体。

$U = X - Y$

$j: U \rightarrow X$ 自然な射影。

§ 1. Fundamental quasi-isomorphism.

次のよろこいて、自然な射影: $\Omega_Y^p \rightarrow H_Y^d(\Omega_X^{p+d})$ がえられる。任意に $o \in Y$ をとると、 o を中心とする $3X$ の局所座標 (x^1, \dots, x^n) で、 $x^i \in U$ かつ $Y = \{x^i = 0\}$ となっているものをとる。このとき写像を

$$\begin{array}{ccc} \Omega_{Y,o}^p & \longrightarrow & H_Y^d(\Omega_X^{p+d}) \\ \downarrow \omega_o & \longleftarrow & \omega_o \wedge \left(\frac{dx^{n+1}}{x^{n+1}} \right)_o \wedge \cdots \wedge \left(\frac{dx^n}{x^n} \right)_o \end{array}$$

によって定める。これが座標のとり方によらず、層の射影を与えることがわかる。別れ intrinsic な定義の仕方もある。
(cf. [2] p. 151 ~)

定理 (相対的 Poincaré 補題): 上記定義 (左).

$$\Omega_Y^p \longrightarrow H_Y^d(\Omega_X^{p+d}) \quad (p=0, \dots, m)$$

は、外微分を微分作用素とする複体の射で、(ともとの
cohomology はひとくじとく)。

$$(*) \quad H^i(\mathcal{H}_Y^d(\Omega_X)) = \begin{cases} \mathbb{C}_Y & i=d \\ 0 & i \neq d \end{cases}$$

(\mathbb{C}_Y は Y 上の fibre, $\in \mathbb{C}$ と \mathfrak{A} 定義層)。

証明： 複体の射であることは、

$$d(\omega \wedge \frac{dx}{x}) = d\omega \wedge \frac{dx}{x} + (-1)^i \omega \wedge \underbrace{d\left(\frac{dx}{x}\right)}_0$$

よりあきる。

後半については、導出函手の一般的手法から。(具体的には
起曲面で cut (てかく論述もあり) $d=1$ の場合に帰着され
る。Poincaré 術題から)。

$$H^i(\Omega_Y^*) = \begin{cases} \mathbb{C}_Y & i=0 \\ 0 & i>0 \end{cases}$$

は分っているが、(*) を証明すれば足りる。

話は局所的であるが

$$X = \{(x^1, \dots, x^n) \in \mathbb{C}^n ; |x^i| < \varepsilon (\varepsilon > 0)\}$$

$$Y = \{(x) ; x^n = 0\} \subset X$$

としておいた。

$$0 \longrightarrow \Omega_X^p \longrightarrow j_* \Omega_U^p \longrightarrow H_Y^1(\Omega_X^p) \rightarrow 0$$

(完全)

だから S, X についての Poincaré 補題と併せておけば、(+) は次の補題から従う。

補題 (Atiyah - Hodge)

$$H^i(j_* \Omega_Y) = \begin{cases} \mathbb{C}_X & i=0 \\ \mathbb{C}_Y & i=1 \\ 0 & i>1 \end{cases}$$

Atiyah - Hodge の [I] に対する証明が、そのまゝ用いられる。仲々おもしろいが、少々長くなるので省略する。

系: $H^i(Y, \mathbb{C}) \xrightarrow{\sim} H^{i+2d}_Y(X, \mathbb{C})$

この同型を homology などつけて

$$H_i^c(Y, \mathbb{C}) \longrightarrow H_{i+2d-1}^c(X, \mathbb{C})$$

は、 Y の cycle と、 Y の各近傍の境界に射影する写像である。

§2. $H_Y^d(\Omega_X^n)$ の構成。

抽象的で一般論はこゝで述べるのはやめることで、ともかく X 上の構成の準備から、そのような構成が定義される。

1) Y 上の大域的積分。

$$\int_Y : H_Y^n(\Omega_X^n) \longrightarrow \mathbb{C}$$

2) X が Y の retract である

ときは、

$$\begin{array}{ccc} X & \leftarrow & Y \\ \downarrow & G/id & \end{array}$$

$$\text{Res} : H_Y^d(\Omega_X^m) \longrightarrow \Omega_Y^m$$

が定義され、§1 で定義した $\Omega_Y^m \rightarrow H_Y^d(\Omega_X^m)$ はその逆写像である。これを留数写像と呼ぶ。Res: はまた fibre 方向の d -次微分形式の束の層 $\Omega_{X/Y}^d$ を用いて、

$$\text{Res}' : H_Y^d(\Omega_{X/Y}^d) \longrightarrow \mathcal{O}_Y$$

ともかけられる。

さて、このより強い条件を加えないと留数写像が定義できないのが holomorphic な場合の特徴である。C[∞] では、 X と Y に十分近い近傍で引きかえてやれば retract が存在するけれども、holomorphic な場合は、局所的には無論あるが、大域的 (Y が n 次) な場合は必ずしも存在しない。

§3. 幾つかの応用。

- 1) $\Delta : X \longrightarrow X \times X$ を対角線写像 (i.e. $x \mapsto (x, x)$)
- $p : X \times X \longrightarrow X$ を第一成分への射影とする。これは Δ

の retract である。これは

$\mathcal{H}_{\Delta(X)}^n(\Omega_{X \times X/X}^n)$ に $\mathcal{O}_{X \times X/\Delta(X)}$ が作用しているから。

$$\begin{array}{ccc} X \times X & \xleftarrow{\quad} & X \\ p \downarrow & G & \searrow id \\ & X & \end{array}$$

$$\begin{array}{c} \mathcal{O}_{X \times X/\Delta(X)} \times \mathcal{H}_{\Delta(X)}^n(\Omega_{X \times X/X}^n) \longrightarrow \mathcal{H}_{\Delta(X)}^n(\Omega_{X \times X/X}^n) \\ \xrightarrow{\text{Res}'} \mathcal{O}_X \end{array}$$

たゞ写像の合成れより、自然な写像

$$(**) \quad \mathcal{H}_{\Delta(X)}^n(\Omega_{X \times X/X}^n) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{O}_{X \times X/\Delta(X)}, \mathcal{O}_X)$$

が定義される。これは容易に分るまじく单射であるが、全射ではない。しかし、 $\mathcal{O}_{X \times X/\Delta(X)}$, \mathcal{O}_X を適当な意味で位相環層とみれば、その連続写像の全体と、上の(**)の像とか一致すると思われる。 $\Delta(X)$ のための ideal 層を \mathcal{I} とすととき、

$$\mathcal{P} = \varprojlim_{k \geq 0} \mathcal{O}_{X \times X}/\mathcal{I}^{k+1}$$

は離散空間の射影的極限の位相で、その意味で連続な写像の全体、(\mathcal{O}_X は離散位相)

$$\text{Diff} = \text{Hom. cont. } \mathcal{O}_X(\mathcal{P}, \mathcal{O}_X)$$

が、少しどの微分作用素であることを考へれば (**) は local operator の層のより具体的な意味付けとみられる。

2) たのたか一次の極の特異性をもつ形式の層 (余次元 1
の場合)

§1で定義した $\Omega_Y^{p-1} \rightarrow H^1_Y(\Omega_X^p)$ の像の、自然な写像 $j_* \Omega_U^p \rightarrow H^1_Y(\Omega_X^p)$ もまた逆像で $\Omega_X^p < Y >$ となり、 Y たのたか一次の極の特異性をもつ p -形式の層となり、自然な射 $\text{res} : \Omega_X^p < Y > \rightarrow \Omega_Y^{p-1}$ を留数写像とよぶ。定義よりあきらめれ、次の可換図式がなりた?

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \longrightarrow & \Omega_X^p & \longrightarrow & \Omega_X^p < Y > & \longrightarrow & \Omega_Y^{p-1} \rightarrow 0 \\ & & \parallel & & \downarrow & & \downarrow \text{(完全)} \\ 0 & \longrightarrow & \Omega_X^p & \longrightarrow & j_* \Omega_U^p & \longrightarrow & H^1_Y(\Omega_X^p) \rightarrow 0 \\ & & & & & & \text{(完全)} \end{array}$$

これら hypercohomology でとり、§1 の定理を用いれば、

命題 : $H^p(\Omega_X^p < Y >) \xrightarrow{\sim} H^p(U, \mathbb{C})$

注意 : $\Omega_X^p(Y) = \{ \omega \in j_* \Omega_U^p : \omega \text{ は } Y \text{ で元が元の} p \text{-位の極をもつ } p\text{-形式}\}$ とすれば、一般に $\Omega_X^p < Y > \subsetneq \Omega_X^p(Y)$ である。しかし容易にわかるように、 $\Omega_X^p(Y)$ の元形式はすべて $\Omega_X^p < Y >$ に含まれる。よって $p=n$ のときは $\Omega_X^n < Y > = \Omega_X^n(Y)$ であり、このときの留数写像

$$\text{res} : \Omega_X^n(Y) \longrightarrow \Omega_Y^{n-1}$$

17. Poincaré residue map とよばれ3。

3) Cauchy - Weil 積分。

Y でのベクトル場 $\Omega_Y^p \rightarrow \mathcal{H}_Y^d(\Omega_X^{d+p})$ の座標表示を
なすことと、積分論とあわせれば、たどられるいわゆる
Cauchy - Weil 積分の式がえられる。つまり、 $Y = \mathbb{P}^1(\mathbb{C}^n)$
とし、0 を中心とする二つの複数の局所座標を $(x^1, \dots, x^n), (y^1, \dots, y^n)$
とすれば、0 の近傍で正則な函数は g^{ij} ($i, j = 1, \dots, n$) が存在
して、

$$y^i = \sum_j g^{ij} x^j$$

とおき、 $g = \det(g^{ij})$ は 0 の近傍で 0 にならない。

$\varphi(x)$ が 0 の近傍で正則な函数とすれば、

$$\begin{aligned} & \frac{1}{(2\pi i)^n} \int_{|y^i|=r} \frac{\varphi(y) g dx^1 \wedge \dots \wedge dx^n}{y^1 \cdots y^n} \\ &= \frac{1}{(2\pi i)^n} \int_{|y^i|=r} \frac{\varphi(y) dy^1 \wedge \dots \wedge dy^n}{y^1 \cdots y^n} \\ &= \varphi(0) \end{aligned}$$

(これは最も簡単な場合をとりあつて元。cf [6])

4) Cauchy - Martinelli 積分

Y が必ず一般の場合を考える。X 上の C^∞ -級 (p, q)-形

次の事の仕事層で $\Omega^{(p,-)}$ とすれば、これは fine sheaf であります。

$$H_Y^i(\Omega^{(p,-)}) = 0 \quad (i \neq 1).$$

従って

$$0 \rightarrow \Omega^p \rightarrow \Omega^{(p,-)}$$

が resolution である (Grothendieck 問題) ことと併せて

$$(***) \quad H_Y^q(X, \Omega^p) = H_Y^{q-1}(H_Y^1(\Omega^{(p,-)}))$$

です。

さて、 $Y = \{0\} (0 \in X)$ の場合を考えてみます。0 と x^1, \dots, x^n との距離を (x^1, \dots, x^n) とします。このとき $p = q = n$ での (***) の右端を具体的にみてみたところ、

$$\frac{dx^1 \wedge \dots \wedge dx^n}{x^1 \dots x^n} \xrightarrow{\text{def}} \frac{(n-1)! \sum (-1)^i \bar{x}^i dx^1 \wedge \dots \wedge \overset{\wedge}{dx^i} \wedge \dots \wedge dx^n}{(x^1 \dots x^n)^n}$$

$$(r^2 = \sum x^i \bar{x}^i)$$

となります。これが Ω^p です。

定理： (Cauchy - Martinelli [4])

$$S = \varphi(x); \quad \sum x^i \bar{x}^i = \varepsilon^2 \quad (\varepsilon > 0)$$

とし、 $\varphi(x)$ を S 上でその内部で正則な函数とします。このとき、

$$\varphi(0) = \frac{(n-1)!}{(2\pi i)^n} \int_S \varphi(x) \frac{\sum_i (-1)^i \bar{x}^i dx_1 \wedge \dots \wedge dx^n \wedge \bar{dx}_1 \wedge \dots \wedge \bar{dx}^n}{(r^2)^n}$$

References

- [1] Atiyah, M.F. and Hodge, W.V.D. : Integrals of the second kind on an algebraic variety, Ann. of Math., Vol.62(1955), pp56-91.
- [2] Hartshorne, R. : Ample subvarieties of algebraic varieties, Lect. Notes in Math. 156, Springer, Berlin, (1970).
- [3] Leray, J. : Le problème de Cauchy, III, Bull. Soc. Math. France, Vol.87(1959), pp81-180.
- [4] Martinelli, E. : Sur l'extension des théorèmes de Cauchy aux fonctions de plusieurs variables complexes, Colloques sur les fonctions de plusieurs variables, Georges Thone, Liège, (1953)
- [5] Norguet, F. : Dérivées partielles et résidus de formes différentielles sur une variété analytique complexe, Sémin. Lelong, 1958/59.
- [6] Weil, A. : L'intégrale de Cauchy et les fonctions de plusieurs variables, Math. Ann. Vol.111(1935), pp178-182.